

《自主研究》

園の保育理念理解に基づく保育実践の創造の特徴

高橋 優子*¹ 戸田 雅美*¹

Characteristics Observed in Establishment of Child-Nursing Practice Based on the Interpretation of the Philosophy of Nursery School

Yuko TAKAHASHI, and Masami TODA

1. 研究目的

本研究の目的は、園の保育理念を保育者がどのように理解し、どのように保育実践を創造しようとしているのか、保育者の語りから明らかにすることである。

子どもが生活を営む場において、保育者同士が保育理念という同じ方向性を持ち、保育を実践することは子どもの育ちにおいて重要なことである。その重要性は、保育所保育指針解説書にも、保育の質を高めていくためには「保育所がそれぞれに掲げている理念や方針について、職員全員が共通認識を持つことが最も大切」¹⁾と記されている。しかし、実際には、園の保育理念を共有し、保育を行うことは容易ではない。横松、渡邊(2009)の研究²⁾においても保育目標が実践と遊離し、机上のものになっていることが明らかになっている。また、筆者自身も保育士として勤務していた時に、保育実践を創造する上で同僚との間に齟齬を感じ、悩みを抱えることがあった。このような状況は、筆者が勤務していた園に留まらない。そこで、本研究では、保育理念を保育者がどのように理解し、どのように保育実践を創造しようとしているのかについて、保育者の語りを手がかりに検討を行うこととする。

2. 研究の方法と倫理的配慮

2つの園(A園、B園)の5歳児クラス担任保育者(各1名、計2名)及びに園長、主任に半構造化インタビューを実施した。インタビュー項目については、①保育理念についての理解、②保育理念に関する印象的な出来事の2つの柱で構成した。園長、主任に対しては別途、③保育者間の共有について思うことを加えてインタビューを行った。

インタビューにあたっては、研究の目的、個人情報取り扱いについて説明し、調査協力への同意を得ると共に、公表に関する承諾を得た。インタビューは、許可を得て録音し、逐語録を作成した。本報告においては、平成28年度に実施したB園の結果を中心に報告する。

3. B園について

B園では、「人として尊重され愛される経験を通して自らを信じ、周囲の人々を信頼し、尊重する心情、意欲、態度が身につけていけるよう育てる」ことを大切にしていると、園長、主任のインタビューの中で語られている。また、特に「子どもの気持ちを大切に」「丁寧なかかわり」というキーワードが繰り返し語られたことから、特に重要視されていると言える。

4. 結果と考察

1) 保育理念が具体的な実践を通して語られる

保育理念を語る際に具体的な実践を通して語られるという特徴が見られた。この点はA園においても同様であった。以下の枠線内は保育者の語りである。

4歳のときに自分の思いを伝えられなくて、自分のことばかりの子たちで、なんでこうなんやろうって思った時に、自分の思いや話を聞いてもらう、分かってくれるんやっていうところが、この子たちにはないかなと思って。子どもの気持ちを大切にしたいって思ったときに、一番は、この子たちの言えん、もやもや感とかを分かりたいってすごく思って、もう徹底的に聞いたわけですよ。その結果かは分からないですけど、自分のことばかりやった子どもたちが、誰かが泣きよったら、どうしたんってすぐ駆け付けてくれたりとか。(中略)私が子どもの気持ちを知らたいって思ってやったことをこうやって返してくれたんやなっていうのはすごくあって。

C保育者は、自分の思いを伝えられない子どもの姿に出会った際にまずは、子どもの気持ちを徹底的に聞いてみようという援助を選択している。この選択自体が、B園の大切にしている「人として尊重され愛される経験を通して」という点と通じる。さらに、尊重される経験を経て、他児を信頼し尊重する子どもたちの姿を目の当たりにしたことにより、園の保育理念の理解を深めたと捉えることができる。つまり、園の保育理念を具体的な実践とつなぎ合わせて理解し、実践をするという往復が行われていることが明らかになった。

*¹ 東京家政大学 (Tokyo Kasei University)

2) 保育理念理解と保育実践創造の間にある困難さ

保育理念に基づく保育実践の創造には、実践を通して保育理念を理解することが大きな意味を持つと示唆されたが、一方で、以下に述べる4つの困難があることが明らかとなった。

(1) 子どもへの願いの強さによって生じる困難さ

根っこには、子どもが育ってほしいっていうのは一番あるんです。でも、その願いが高過ぎて、今の子どもとずれてるといふか（中略）例えば、J君で言うと、遊べんしすぐ手出し、友達の中に入ってくとも不器用やし。こうなってほしいって願いが高いから悪いとこばっかりに目がいくわけですよ。そこをどンドン言ってしまう部分があつて。それも私は分かってるんですけど、でも拭い去れなくて。そこが私の課題なんですけど。（中略）振り返ってみると、J君には優しい部分もあったり、遊べる姿も見えて、そうか、私の願いは高すぎたんやなって思つて。

今の子どもの姿を見て、こうなって欲しいと願いを持つことは、当然のことである。しかし、C保育者の語りから、保育者の願いが強くなりすぎてしまうと、子どもの気になるところばかり目がいってしまい、子どもの思いを大切に実践を行おうとする際に壁が生じることが示唆された。

(2) 保育の個と集団の両義性が生む困難さ

J君が友達との間で、もどかしさがあるのはわかるし、そうやろなって思うんですけど、やっぱその子だけじゃない。周りの子がいる状況で、その子たち一人一人の思いもあるし、それも関わってると思うんです。

子ども一人一人の思いを大切に実践を行う時、J君の思いを大切にすることと、他の子どもの思いを大切にすることはイコールでないことも多く、両義性を抱えている。鯨岡は子ども一人一人の思いを受けとめ、子どもに表現して返すことの難しさの一つとして、保育の場が集団であることから「誰の思いを今受けとめるべきかの選択が保育者には常に課せられる」³⁾と述べている。集団での生活という特性上、抱えてしまう困難さであるといえる。

(3) 余裕がなく保育理念に目が向かない

若い先生が1年間やってきた中で、うちの保育の大切さをどこまで分かってくれたんかなって。やっぱり1年じゃなかなか難しいよねっていうことも気付くし（中略）

なかなか目に見える進歩がないよな。それが何でかなって思う。もう目の前のことで手一杯で。取りあえず1日を過ごすことが必死になって。丁寧な関わりって何よって以前の問題やなっていうのが、見てたらやっぱり思うんですよ。

主任の語りからは、若い保育者が保育理念について理解し実践を創造ようとしている実感を得ていないことが読み取れる。その要因として、子どもが落ち着いて生活を送れていない現状と、その対応に追われることで精一杯であることを挙げている。つまり、保育者に余裕がない状況においては、園の保育理念の理解やそれに基づく実践の創造に目が向かない可能性が示唆された。しかし、子どもが落ち着いて生活を送るためには、園の保育理念に基づく実践の創造が必要であるとも考えられる。この点においては、新任者へのインタビューを行うなど検討が必要である。

(4) 保育理念と実践をつなげた語りに至らない

話すときには「こういうことですか」、「こういうこともありましたよね」っては言ってはくれるけど、いざ子どもの前に立って子どもと関わっていく中では、それが出てこんのは何でなんて。言うたやん、この間って思うけど、それがやっぱ現場では重なってこんっていうか。経験がものをいったになってないんですよ。

保育者同士が園の大事にしていることの共通認識をもつために、園内研修等の話し合いが重要であることは、上田(2014)の研究⁴⁾によって明らかにされている。しかしながら、B園の主任の語りに見られるように保育理念と実践がつなげて語られていない場合は、必ずしも話し合いにより、保育実践の創造につながる共通認識が生れるわけではないことが示唆された。なぜ、園の保育理念と実践をつなげて語ることができないのか。その要因については、③で述べたような目の前の子どもへの対応に追われ、子どもの気持ちを大切に丁寧な関わりが難しいという点と関連する可能性が考えられるが、今後検討が必要である。

文 献

- 1) 厚生労働省(2008). 保育所保育指針解説書 p. 203
- 2) 横松友義, 渡邊祐三(2009). 各保育園におけるこれからの保育課程開発のための園文化創造アドバイザー支援に関する考察. 岡山大学大学院教育研究科研究集録14. pp. 29-42
- 3) 鯨岡峻(2006). 保育って何だろう. 保育通信609.
- 4) 上田淑子(2014). 園内研究と園長のリーダーシップ. 甲南女子大学研究紀要50. pp. 7-12